

■(藤原)中臣鎌足
なかとみのかまたり
遣隋使5・・・614=

官人、政治家。大化改新の功臣で藤原氏始祖。天皇中心の律令制国家建設に貢献。出自には謎も。

推古天皇の朝廷小墾田宮に近い山倭国高市郡藤原の弟で、推古・舒明朝に仕えた大夫兼神官、小徳中臣連食子(弥気)の長子に生まれる。母は大徳大伴連嚙の娘智仙娘で、大連大伴金村の孫。鎌子ともいうが、足、子は尊称で本名は鎌。

中臣氏に生まれた鎌足は、祭官として神事に携わり、かつ大夫として朝議に参加すべきであったと思われるが、その伝記は、藤原不比等が成立させた「日本書紀」、藤原仲麻呂が祖先顕彰の目的でまとめたらしい「大織冠伝」によるため、虚実は疑わしく、

聖徳太子没・622=8歳：
征新羅軍派遣 623=9歳：

生まれつき体は大きく、容姿もすぐれたといい、幼時より、儒教や古典の兵法に親しみ、太公望(呂尚)の兵法書「六韜」を暗誦、青年時代には、唐から帰国した僧旻、南洲請安らについて、周易や儒教を学ぶ。

・・・・・・・629=15歳：「大織冠伝」に、舒明朝のはじめ、良家の子を選び、朝廷の祭祀を掌る中臣氏の宗業を嗣がしめたが、鎌足だけは固辞して、摂津の別業に退いたとあり、

唐使伴い帰国 632=18歳：

神事よりも国政への志が強く、緊迫する国際情勢に対処すべく、蘇我氏専制体制へ対抗、

・・・・・・・641=27歳：舒明天皇が崩じると、軽皇子の即位を画策するが、蘇我入鹿は、皇極天皇が即位させて実権を握ると、

蘇我入鹿の乱 643=29歳：長男定恵が誕生。いきなり、聖徳太子の子山背大兄王一族を滅したため、ついに、打倒の意志を固め、
・・・・・・・644=30歳：「大織冠伝」で、中臣氏の宗業を嗣ぐのを固辞したというのを、「日本書紀」ではこの年のこととしている。皇極天皇の弟軽皇子(のちの孝徳天皇)に、次いで、舒明天皇と皇極天皇の子中大兄皇子に接近して(有名な蹴鞠の話は、中国の類似の話の援用か)、密かに謀議、

乙巳の変・・・645=31歳：蘇我一族内部の対立に乗じて、蘇我石川麻呂や佐伯子麻呂を味方に引き込み、*飛鳥板蓋宮での儀式の場で、入鹿を斬ることに成功、皇族・群臣のほとんどが中大兄皇子側についたため、孤立無援になった(入鹿の父)蘇我蝦夷は自害。皇極天皇を強制退位させて、軽皇子を孝徳天皇とし、中大兄を皇太子、阿倍内麻呂と蘇我石川麻呂を左右大臣、僧旻・高向玄理が国博士にするも、自らは、寵臣・帷幄の臣を意味する、正式の官職ではない内臣として、皇太子を補佐。孝徳は、年号を大化と改め、都を難波の長柄豊碕宮に遷し、

改新の詔・・・646=32歳：改新の詔を発し、律令体制を整備していったとされるが、鎌足の事蹟はしばらく見られない。

・・・・・・・650=36歳：前年に長門国から献上された白雉の祥瑞を祝い、年号を白雉に改め、

第2回遣唐使 653=39歳：長男定恵が入唐。中大兄皇子が都を飛鳥に戻し、

中臣鎌足紫冠 654=40歳：これに同意せずに、難波にとどまった孝徳天皇が崩御、皇極が再び即位して斉明天皇になると、

斉明天皇重祚 655=41歳：大臣の位にあたる紫冠を、続いて、死去した右大臣大伴長徳の後任人事としてか、大紫冠(正三位相当)を授けられ、封戸を多数加増されて、後に発展する藤原氏の経済的財産基盤になる。

有間皇子謀殺 658=44歳：次男不比等が誕生、

第4回遣唐使 659=45歳：

朝鮮出兵・・・661=47歳：百済の鬼室福信らの援軍要請により、外征に備えて斉明天皇自身筑紫に赴いたが、朝倉宮で崩じ、

・・・・・・・662=48歳：中大兄皇子が称制して、天智天皇になると、以前に増して緊密となり、

白村江の戦い 663=49歳：白村江の戦いで日本軍が新羅・唐連合軍に敗退すると、

国防ライン整備 664=50歳：対唐・新羅外交を進めながら、天智の甲子の宣を公表、制度改革による国内支配体制の確立、

・・・・・・・666=52歳：長男定恵が帰国するもまもなく死去。

大津京遷都 667=53歳：さらには、近江の大津に遷都を支援、

興福寺・・・668=54歳：近江令を撰したといわれるが、実際には完成しなかったようである。*中大兄皇子は、この年、正式に即位。群臣を召して琵琶湖畔で酒宴を開いた際、天智の怒りに触れた大海人皇子(後の天武天皇)を弁護、大事にはいたらず、以後、大海人皇子からも厚く信頼されて、両者の仲裁に努めたという。

中臣鎌足没 669=55歳：*近江の大津京の邸で病が重くなり、天智みずから私第に見舞い、次いで大海人を遣わして、大織冠(正一位相当)を授け、内大臣に任じ、藤原氏を賜わったが、まもなく没した。

百済からの亡命者沙宅紹明が碑文を撰したうえ、興福寺縁起には、鎌足発願の釈迦三尊像を本尊とし、本来ありえない王族の正室鏡女王が夫の病氣平癒を願って創建した山階寺が起源といい、大織冠は、高句麗に亡命したとされる百済の豊璋王以外に例がなく、後世、鎌足の異名となり、内大臣というのも、当時、そういった官職はなく、それまで内臣であったのを内大臣と表記するようになったに過ぎないこと、藤原の姓も、中臣氏が広く継承したが、のちの不比等の時代に、その系統にのみ限定する詔が出されること、長男定恵と次男不比等鎌足は15歳も年が離れているうえ、若くして入唐した定恵は、23歳に帰国するも、その年に死去していること、したとされるなど不可解なことが多く、鎌足の百済王子説が流布し続けることになる。